

#### 第四節 選考委員からの言葉

久留米市民に敬意を

高橋 順子

第十二回から第二十三回までの十二年間、清水哲男氏とともに丸山豊記念現代詩賞の選考に携わらせていただき、その前には私自身、第十回の同賞をいただくという幸運に恵まれ、おかげで詩人丸山豊を育んだ久留米を何度も訪れることができました。毎年五月、薔薇の咲く季節に久留米に足を踏み入れると、まず日差しの明るさに心が感応するようでした。私の住んでいる東京は北にあるということを意識させられ、日陰の国から日向の国にやって来たように心躍るものがありました。

町起こしの目的で詩や俳句の文学賞を設定する地域もこの国には少なからずあって、私も東北の一つの町のお手伝いをしてきました。久留米という町は改めてそんなことを図らなくてもすでに実力のある町であり、都市でありますので、実際的な目的をもたずに、理想的といつていい催しが二十五年もつづいてきたということに感嘆します。

それも詩人・医師である丸山豊が市の人びとの尊敬を集めてきたということが大きいと思われませんが、詩人がアウトサイダーに、余所者のように見られずに、同じ市民として、それどころか敬愛の念とともに彼を包み込んでくれる一人ひとりの意識があつてこそ可能になったことだと信じます。詩を読む市民がいるということは素敵です。

毎年優れた抒情詩人を推薦させていただきましたが、ここで改めて丸山豊の詩を読んでみたくなりました。『愛についてのデッサン』から。

私から愛を

わがままな愛を追放して

ラッキョほどのものがのこつたら

さらにその夜が新月なら

私は死んでもよい

丸山豊は、軍医として戦場で地獄を見た衝撃的な随筆『月白の道』の作者でもあります。虚無的になってもおかしくないところを、自分では「ラッキョほどの」愛といいますが、それを無私の心をもって大きく育て、詩誌「母音」を主宰してよく物心両面にわたって後進の面倒をみました。医師としても病者への愛情をそそいだことと推察されます。暑苦しい愛ではなく、きつと他者への配慮に満ちた愛であつたことでしょう。

丸山豊の詩の根底には涼やかな愛があつたとして、同じようなものを現在の詩人たちに求めるわけにはいきません。亜流の詩は丸山豊も喜ばれないでしょう。新しさがなければならぬ。少なくとも私が念頭に置いたことは、詩の巧さや完成度ではなく、ことばに力がみなぎっているか、どうかだつたように思われます。それから久留米市民に読んでもらいたいかどうか、でした。後者のほうは、一見難解な詩集で、ご無理を強いた年があつたと思いますが、詩人の自作解説で、経験が詩に昇華していくさまを語ってもらいました。こういう詩もあるということをお伝えしたかったので。

ことばに力があるということは、詩想が借りものではないということ。私たちに詩人の深い経験を伝え、感動させてくれます。

抒情詩というと甘くて感傷的な詩だと勘違いする人もいます。うですが、骨太の、硬質の抒情詩もあります。ほろ苦かったり、おかしかったり、また楽しい詩もあります。

選考委員は二名なので、多数決では決まらないというところが詩集の賞らしくていい、というの曖昧な表現ですが、双方目盛りが下りてくるまで、ああでもない、こうでもないと話しかけた挙句、ふとその人の経歴を話した途端に納得がいつて、同意に至った例などもありました。詩と実人生とは切り離せないものと私は思っています。実人生べったりという意味ではないのですが。

一人二、三冊の候補作を事務局にもお知らせした上で持ち寄り、選考会にのぞむのですが、自信がないときもありました。もつといい詩集を清水さんがもってきたら、それに賛成しようと思っていたところが、そうでもなく、もう一回探そうと会を閉じたことも二度ほどありました。あとはメールでのやりとりで決まったこともあります。その反対に短時間で決まり、早々と祝杯を上げたこともあります。

現在書かれている詩はとも洗練された詩が多くなって、ことばの意味がとりにくく、音楽に近づいているようなものもあります。パソコンの上で流れるようにおしゃべりしている詩もあります。そういう詩集は選んできませんでした。ことばに力がないからです。

贈賞式での音楽の演奏はいつも楽しみでした。いい詩を書くことで祝福されるのですから、詩に携わるものにとつて、この上なくうれしいことでした。毎年受賞者の講演と朗読があるのですが、選考委員も自作詩の朗読をさせてもらったことが三、四年つづきました。清水哲男氏はFM東京のパーソナリティをしていたこともあり、名司会者でもありました。そのような式典は詩祭といった感じで、いまや遠い夢のようです。

受賞者のどなたかを特別に取り上げることにはしないにしようと思つて書きだしたのですが、二〇〇八年、第十七回受賞者の

古賀忠昭氏については、他の方も許してください。詩集『血のたらちね』は生き死に見据えるもので、そこにこもる怨念というか腹の底からの叫びが異様な感動を与えてくれるものでした。古賀氏が久留米市民で丸山豊家の書生として過ごした経験をもつということは、受賞決定の理由となるものではなかったと申し上げておきたい。清水氏が「裂帛の気合い」と評したことにはうなずきました。

古賀氏は受賞決定の折りは闘病中で、五月の贈賞式を待たずに四月十四日逝去されたそうです。あまりに劇的でした。郷里で詩人として認められた後、どのような詩を書いていられるのか、どのような変貌を遂げられるのか、あるいはどのような充実ぶりを示されるのか楽しみだったので、私はその年は四国遍路で大怪我をし、療養中だったので、伺えませんでした。

それから第十四回受賞者の森崎和江氏が、丸山豊先生をしるんで講演なさったことが胸にしみました。会場いっぱいの方々が耳を傾けました。

受賞者おひとりおひとりの顔が目には浮かびます。性別や年齢も詩風もさまざまですが、丸山豊賞受賞者にふさわしい詩的営為を今後もつづけていられるだろうことを期待し、念じております。丸山豊生誕百年にあたり、氏を顕彰してこのような催しをなさる久留米市民のみなさまに改めて敬意を表します。